

説教「偉大なる者の先駆け」

(士師記 13 章 2-5 節 マタイによる福音書 11 章 7-15 節)

2020 年 12 月 13 日待降節第三主日礼拝

日本基督教団仙川教会

大串 肇 牧師

ヨハネの弟子たちが帰ると、イエスは群衆にヨハネについて話し始められた。「あなたがたは、何を見に荒れ野へ行ったのか。風にそよぐ葦か。では、何を見に行ったのか。しなやかな服を着た人か。しなやかな服を着た人なら王宮にいる。(7-8 節)

獄中にいるバプテスマのヨハネが自分の弟子たちをイエスのところに遣わしました。実はこのバプテスマのヨハネとイエスには以前からかかわりがありました。イエスはヨルダン川でヨハネから洗礼を受けました(3:13 以下)。そしてヨハネが逮捕されたあと、主役を交替するかのようにはイエスはガリラヤで神の国の宣教を開始されました。イエスの数々の奇跡や癒しの業等の評判をヨハネは聞き、どうしてもイエスが来るべきキリストであるかを確認できなかったのでしょうか。他方、イエスはヨハネの弟子たちが帰ると群衆にヨハネについて話し始められました。

「あなたがたは、何を見に荒れ野へ行ったのか。風にそよぐ葦か。では、何を見に行ったのか。しなやかな服を着た人か。しなやかな服を着た人なら王宮にいる。では、何を見に行ったのか。預言者か。そうだ。言うておく。預言者以上の者である。」(7-9 節)

ヨルダン川に沿った荒れ野では葦が茂っていました。しかしイエスは比喩を用いてヨハネやイエスの最大の敵対者であったヘロデ(アンティパス)王について語っているのです。イエスの説く神の国と地上の王の支配する国とは全く異なるものです。当時の王であったヘロデ王のコインにはこの葦の模様が刻まれていました。葦が様々な風によって揺れ動くように、ヘロデは様々な政治的な方向になびく実には便りのない存在です。ヨハネは「しなやかな服」を着飾る王宮人ではありませんでした。ヨハネはかつてのエリヤのような預言者のような存在でした。しかし預言者以上であるとイエスは言われました。ヨハネは神の国が近づいてキリストが来ること、悔い改めることを宣教していました。しかしそれだけではないのです。彼自身が到来すべき神の国の一部であり、旧約の時代から待望されていた約束の人物なのです。10 節では旧約聖書の言葉が引用されています。

『見よ、わたしはあなたより先に使者を遣わし、／あなたの前に道を準備させよう』／と書いてあるのは、この人のことだ。はっきり言うておく。およそ女から生まれた者のうち、洗礼者ヨハネより偉大な者は現れなかった（10-11 節）

出エジプト記 23 章 20 節によれば主の「使い」（「天使」）であり、マラキ書 3 章 1 節によれば「契約の使者」を 神の国、キリストが来る前に遣わすと神は約束されました。これらの約束が洗礼者ヨハネの到来によって成就したのです。

「すべての預言者と律法が預言したのは、ヨハネの時までである。あなたがたが認めようとするれば分かることだが、実は、彼は現れるはずのエリヤである」。（13-14 節）

マタイ福音書にとりまして最も重要なことはヨハネがエリヤならば、その後のキリストはイエスであるということです。こうしてイエスによって神の国は到来したのです。その事実を受け入れること、「耳のある者は聞きなさい」と言われている通りです（15 節）。しかしマタイ福音書中最も難解な個所のひとつでもある 12 節ですが 11 節からお読みします。

洗礼者ヨハネより偉大な者は現れなかった。しかし、天の国で最も小さな者でも、彼よりは偉大である。彼が活動し始めたときから今に至るまで、天の国は力づくで襲われており、激しく襲う者がそれを奪い取ろうとしている（11-12 節）

「最も小さな者」とはイエスではありません。恐らくここでは弟子たちのことが考えられているでしょう。そしてキリストを信じる人々の事を指示していると考えられます。つまり、ヨハネは確かに偉大な先駆けではありますが、イエスを信じて神の国に入ることがいかに偉大なことか、神の恵みの偉大さが讃えられているのではないのでしょうか。しかし、「力づくで襲われており、激しく襲う者がそれを奪い取ろうとしている」のです（12 節）。すなわち、到来しつつある神の国は輝かしい栄光や勝利、権力や力ではなく、むしろ多くの抵抗や迫害や暴力、様々な試練を受けることが言われているのです。このあと、獄中のヨハネは残酷な仕方で殺害されます。そしてイエスは十字架に付けられて処刑されてしまいます。人類は神が遣わした預言者も救世主も拒否し、それどころか自分に手で殺害してしまったのです。まさにこれがわたしたちの罪深さなのです。しかしこのような現実から目をそむけず、神はわたしたちを赦すために愛する御子をわたしたちの下に遣わしてくださいましたのです。それは誰一人罪の中で死んで滅びることなく、永遠の命を得るためなのです。御子はそのために尊いご自身の命を十字架で捧げられたのです。この十字架の救いの Advent 「到来」こそ、わたしたちの喜びであり、いのちなのです。お祈りいたしましょう。